

# 育 兒 訓

- 一、菓子や密柑を以て子供の心を釣り、善事を勧め、悪事を懲すべからず。
- 一、憤らした儘で子供を寢床に入る、は最も悪しき事と知れ。
- 一、子供に強い光線を見せ、或は化物の話をすべからず、殊に就褥前に然りとす。
- 一、五歳未満の子供は、決して動搖木馬に乘らしむべからず。
- 一、突然聲を擧げて、子供を吃馬せしむることなど注意すべし。
- 一、動擧の靜肅と食物の清淡は、小兒の身體と精神を健かにする基なり。
- 一、些細な事を一々責むべからず、此を爲せよ、彼を爲せよ、开廢事をなす勿れと一々叱言を云ふべからず。
- 一、母親の温かくして樂しき心は、陰鬱なる世界を變じて、光輝ある樂園となす。

# 愛情と子女の養育

樂 天 子

一六

凡そ人の母たる上は、必ず子女あるを常とし、而して苟くも子女あれば之を養育して生長せしめなければならぬ、けれども兒女の養育も若し愛に溺れて、威嚴を欠かば、終には放縱無頼の徒となり易い、然れども親として子を養ひ育つことは、今茲に多言せず、最も注意すべきは繼子の養育である、自己の生みたる子は之を愛するも先妻の子は、無情に之を待遇して、世人の非難を受くるものが多い、先妻は不幸にして死亡するか、離縁するときは、後に残されたる子女は、實にその恃む所を失ふものである、故に繼母にして慈愛深く之を養はば、彼れもまた眞の母のごとく之を敬ひ事ふべきも、若し陽に慈愛を粧ふて陰に之を憎み、已れの眞正の子と先妻の子との間に區別を設くるあらば其の子は之を怨むべく世人は之を擯斥するに至るのである、元來昔は繼母なるものは必ず繼子を慈まざるものゝ如くに思ひ、子

女を抱きて眠るにも自己の寢衣の外に抱きて親しく肉體に密接せしめざるを繼子抱とまで稱するに至つた、故に普通の實子と同一に待遇しても既に繼子を以て遇するかと疑はるゝのが常であつた、故に其の待遇は寧ろ實子よりも、一層心を用ゐなければならぬ。

世には不幸にして實の子女なきものもあり、此の如きは他人の子女を養ふて子となしければならぬ、他人の子女にても能く親切に養はば其交情は全く實子と同じ様である、かの杏樹に梅枝を接ぎても能く梅樹たらしむることができ、故に養子をして家を續がしむべきものは、其養子を以て實子と同一に待遇し、他日能く自己の家名を汚がさざる人物を養成することを考へねばならぬ、古來の諺に子女を有せざるものに子女を與ふる勿れと言つて、自ら子女を生みしことなきものは、輒もすれば子女の愛情を知らざるが故に養子女に對して無情なるものと断定した、是れ全般につきて然りといふにあらざるも、多數の習慣を類推したものである、故にまた深くこの邊に留意せねばな

らぬ、養子または實子にても、其家を嗣がしむべきものは、唯一人にして、その者は他日自己に代つて家を嗣ぎ、益々家運の隆盛を圖るべきものである、若し不幸にして家督を繼ぐべきものなければ、生前に貯へたる財産はつまり他人の手にわたらねばならぬ、また其相續者なければ貯蓄するも無益だと思つて、つまり濫用妄費して、遂には死後の追善費にも事を缺き、永く祭祀を營むことが出来ぬ、故に實子なくして他人の子を養ふものは、深く注意して恰かも實子のごとく赤心より親切に之を養育せねばならぬ。

畢竟親子間の感情は外形にあらずして、心意にあるので、如何に表面に愛情を裝ふも、心中之を愛するにあらざれば、決して之を慕はず、反て表面にはたゞ懲らすことがあつても、内心に一片の愛情を蓄ひ、寐ても覺めてもこの愛情を絶たざれば、知らず識らずの間に感化せられて之を慕ふやうになる、かの平生愛撫するものは犬馬と雖も猶ほ之に感じて慕ひ仰ぐこと誠に慈母のやうであり、繼子女又は養子女の我を慕ふと否と。

情の如何を顧みねばならぬ。

今茲に小兒養育の大要を述べん、小兒の時殊に分  
 娩後三四歳までの間は、身體最も虚弱にして且つ  
 發達の速かなるものである、故に些細の不注意も  
 疾病を起し易く、又些細の疾病も生命に關しやす  
 い、而して最も小兒の健康を害ひ易きものは、飲  
 食物である、故に第一に飲食物に注意せねばなら  
 ぬ、嬰兒の食物は乳汁を第一とし若し母の乳が不  
 足ならば乳母を雇ふか、牛乳におよそ三分一位の  
 清水を混じ、少しの砂糖を加へて飲ましむるの  
 よい、乳汁の不足はやゝもすれば成長の後虚弱と  
 なり易い、又たとへ乳汁に不足なくとも、母また  
 は乳母の身體に健康を欠くことがあれば、その乳  
 を吞ませてはならぬ、凡そ乳より傳染する疾病は、  
 小兒畢生の痼疾を生ずるもので實に恐るべきもの  
 である、又母および乳母の飲食物を慎しまざれば、  
 その毒を小兒に傳ふる故に成るべく滋養物を食し  
 て、酒のごときアルコール質のものは固くこれを  
 禁じなければならぬ。

小兒の程々長じて食物を喫するに至りても、成る

べく之を興へずして玩弄物を以て之に  
 い、玩弄物は如何に多く興ふるも智識を  
 にして、身體を害することはない、之に反して小  
 兒の泣けばとて、食物を興ふるときは、胃腸を害  
 し又はその他の疾病を生じ易い、小兒の身體は頻  
 りに生長發育するものであるから、衣服は身體に  
 緩るやかに之を製し、必ず固く括つてはならぬ、  
 子守はつとめて温良の性質を擇ばねばならぬ、然  
 らざれば自己の遊戯に耽つて危険を冒し或は小兒  
 の身體に負傷せしめ、また見聞することは永く記  
 憶して忘れないものであるから不良の子守は小兒  
 の性質を誘ふて不良ならしめ易い。

また小兒の身體は最も清潔にし、日々湯に入れし  
 め、不潔物などの身體に汚染せざるやうにしなけ  
 ればならぬ、若し然らざれば其局部に糜爛を生じ  
 又は他の病氣を引きおこすことがある、兒女の居  
 間は空氣の流通を便にし、且つ成るべく静かなる  
 野邊に出で、遊ばしむるのがよい、けれども烈日  
 く太陽の輝く所に於て眼を照らさるゝときは、目  
 を傷め甚だしきは不治の眼病となるから深く注意

せねばならぬ、睡眠の時には軽くして暖かなる毛布のごとき物を蔽ひ其の身體の發育を妨げざるやうにとめなければならぬ。

### 成功と十教訓

- 一、一夜二夜の徹夜位には毫も倦怠の色を現はさざる程の健康力を有する事
- 二、明晰精緻なる数字的の頭腦に兼ねるに敏活の手腕と應用の才とを兼ねる事
- 三、一事を處理するには必ず完全なる終點を打ち然る後新たな他の仕事に向ふ事
- 四、用談には常に簡潔敏活の判斷力と言語とを用ゐて着々要點を捉ふるの實務的習慣を有する事
- 五、爲すべき事と爲すべからざる事と言ふべき事と言ふべからざる事に嚴格にして且細心なる注意力を有する事
- 六、自個の爲したる事には必ず完全なる辯明を保持し他より切り込む寸分の隙をも

- 七、容易に與へざる事  
容儀に虚々實々の奥底と對手の心理作用を即座に看破する丈の眼力を具備する事
- 八、奪ふべからざるの節操と容易に他人に譲る變通の才とを明白に兩立せしむる丈の腹ある事
- 九、執務に陰日向あるものは三日間位にて必ず爛眼なる上役に看破せらるゝものなる事を堅く自覺すべき事  
同時に金錢を以て雇用しつつある上役のものはお世辭よりも面諂よりも金錢に相當する或はそれ以上の働き振を見せらるる事を喜ぶものなる事を根本的に自覺する事
- 十、時間を嚴守することは勞甚だ少なく功頗る多きを心得べき事(太平洋)